

クリスティナ・ロセッティの詩における 助動詞“shall”の用法

藤田 晃代

序

ヴィクトリア朝の詩人、クリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-1894) は生涯にわたって多彩な詩を残した。その語法的特徴について特筆すべきは助動詞の多用であり、なかでも助動詞“shall”は詩の語りにおいていずれも話者の強い意志と予言を表す用法を中心に用いられている点が注目される。クリスティナの詩作品を助動詞“shall”の用法を中心に考察すると、文法上の機能に加えて“shall”を否定文において技巧的に用い、詩の語りに読者を引き寄せる効果を上げ、やがて詩の最終部で動詞とともに助動詞を消失させることで語り手ないし主体の存在を逆に強調する結果をもたらすという独特の論理構造が浮かび上がってくる。助動詞“shall”の用法をめぐってクリスティナの詩作品のなかから、初期および中期の代表的な四作品“Dream-Land”(1849)、“From the Antique”(1852)、“Moonshine”(1852)、“Meeting”(1864)⁽¹⁾を中心に提起し、語りの構造を考察するのが本稿の目的である。

I 助動詞 “shall” と詩の言葉

クリスティナ・ロセッティの詩のなかで多く用いられる助動詞“shall”について、まずは文法上の定義および詩の言葉に関連させて考察する。助動詞“shall”は『ロイヤル英文法』によると「話し手の意志」をあらわすとして主語が一人称の場合、二、三人称の場合の例文がそれぞれ取り上げられている。⁽²⁾ また「二、三人称では〈約束・予言・規定〉もあらわし、古い文書や法律・規則など堅い指示文に見られる形で、どれも文語的」⁽³⁾とされる。『研究社英和大辞典』においては「(shallは) 話者の意志とは無関係に起こる未来の出来事を表して (用いられる)」⁽⁴⁾とあり、「この用

法のshallは多少とも運命的必然（fatal necessity）が含まれるのでwillとはnuanceを異にする」⁽⁵⁾という。またOEDではまず“shall”の定義として“An utterance of the ‘shall’; a command, promise, or determination”⁽⁶⁾と示され、“The word ‘shall’ as idiomatically used in contradistinction to ‘will.’”⁽⁷⁾とあり、意志未来そして単純未来を表す助動詞“will”と対照区別されるものとして使われる点が挙げられている。またその意味については“Indicating what is supposed to take place”⁽⁸⁾とされることから、予言や規定を表す用法とも合致し、さらに“shall”の人称別の用法に関しては、一人称で用いた場合、“In the first person, used in question to which the expected answer is a command, direction, or counsel, or a resolve on the speaker’s own part.”⁽⁹⁾とあり、また、二、三人称で用いる場合には、“In the second and third persons, expressing the speaker’s determination to bring about (or, with negative, to prevent) some action, event, or state of things in the future, or (occasionally) to refrain from hindering what is otherwise certain to take place [.]”⁽¹⁰⁾と述べられ、さらに“[W]hile retaining its primary sense, served as a tense-sign in announcing a future event as fated or divinely decreed.”⁽¹¹⁾とされ、“Hence *shall* has always been the auxiliary used, in all persons, for prophetic or oracular announcements of the future, and for solemn assertions of the certainty of a future event.”⁽¹²⁾とすべての人称において“shall”の持つその予言的性格が言及されている。いずれにしても助動詞“shall”は予言すなわち話者の意志とは直接関係なく起こる未来の出来事に言及する場合か、話者の強い意志を表す際に用いられる助動詞であることが各辞書の定義から明らかである。

一方、詩と言葉についてPhil Robertsは“In all ages, one of the poet’s main efforts has been to use language in a performance which will make people listen, not simply because of what the poem says, but because of *how* this is said.”⁽¹³⁾と述べており、詩は「いかに表現されるか」に重点を置いた言葉による芸術であり続けてきた点を強調している。Robertsは続けて“It follows then that the language of poetry must have an extremely high information content.”⁽¹⁴⁾と述べ、詩が伝えるものは言葉が持つ意味のみならず、その言葉が内包する豊かな情報によって詩人が描く世界であることも言及している。

このようにみると、クリスティナが用いた助動詞“shall”も単に文法上の用法としてのみならず、詩人が詩の世界を描くための技巧や意義をも読み解く言葉としてとらえることができるだろう。クリスティナは詩中において主に一人称および三人称の語り手による語りの際に“shall”を多用してきた点が注目されるが、以下、詩人が助動詞“shall”に込めた意味を動詞の時制や主語との関係も含めて読み解いていく。

II 助動詞“shall”の効果

助動詞“shall”の用法について論じるにあたって、まずは“shall”が語り手の意志や未来を表す助動詞“will”と明確に区別されて用いられていることを示す例からみていく。クリスティナのダブルソネット“Two Thoughts of Death”(1850)は語り手を裏切ったままこの世を去った元恋人への恨みと嘆き、語り手の自戒をうたった詩であるが、ソネット一番の締めくくりで話者の強い意志が“shall”で示されている。元恋人の亡き後、その思い出に浸りながらも彼女の不誠実さを嘆く語り手は埋葬された後の元恋人の様子を“Even as her beauty hath passed quite away, / Theirs too *shall* be as though it had not been.”⁽¹⁵⁾ (13-14, イタリアック体は筆者による)とうたい、美しい花も元恋人のように必ず朽ちるであろうことを明確に「予言」する。ここにはいかなる場合も死が避けられないことを強く確信する話者の姿勢がうかがえる。続くソネット二番では裏切られたとはいえ彼女との思い出を忘れることができない語り手が花を摘もうと手を伸ばす。花に手を伸ばしたと同時に花卉に隠れていた蛾が飛び立つのだが、ここに彼女の「魂の飛翔」を重ね合わせた語り手は恨み嘆いた行為を自戒する。

Then my heart answered me : Thou fool, to say
That she is dead whose night is turned to day,

And no more *shall* her day turn back to night.(27-28)

この世を去った彼女への思いを振り返り自戒した話者はダブルソネットの締めくくりで助動詞“shall”を使い“will”よりも明確に自らの信じる思いを反映させている。“shall”によって語り手と呼びかける相手（彼女）の関係がより劇的になる効果を醸し出しているといえるだろう。

“shall”が詩の語り手において劇的な効果をもたらす例は短詩“Song”(1849)にも見られる。“Song”は一人称の語り手が、自分がこの世を去った後、残

された者たちへ伝える言葉を綴った詩である。語り手は愛する人に対して自分が亡き後のことを呼びかける。「私がいなくなっても／悲しい唄をうたわずにいてほしい」(“When I am dead, my dearest / Sing no sad songs for me[.]” 1-2) とはじまるこの詩は第一連の終盤二行と続く第二連の前半三行で “will” と “shall” が対比されて用いられる。

 Be the green grass above me
 With showers and dewdrops wet;
 And if thou *wilt*, remember,
 And if thou *wilt*, forget.

I *shall not* see the shadows,
 I *shall not* feel the rain;
 I *shall not* hear the nightingale
 Sing on, as if in pain [.] (5-12)

呼びかける相手の意志を表す助動詞はここでは古形“wilt”になっているが、相手に「(そのような思いがあれば) 忘れないで／(もしくは) 忘れて」(7-8) と条件節で用いられる“wilt”は続く連で語り手が自らの置かれた場所を語る際の“shall”と対比される。まだこの世に生きる相手の意志が“wilt”に反映されている一方で“shall”は「これからのこと」を予期して述べる語り手の意志を表している。「これからのこと」に語り手が言及する第二連では“shall”が繰り返し使われ、「影を見ることもなければ／雨を感じることもなく／苦悩に満ちて歌い続ける／ナイティンゲールが鳴くのも聞かず」(9-12) と感覚動詞とともに否定文で表現されていることから、語り手はすでに生きる者たちへと積極的な働きかけはできないことをうたえていると考えられる。ここではいわば“shall”は語り手による「微弱な意志」の表明ともとれるだろう。相手にはすでに届かないかもしれない思いを“shall”に込めてうたっているのだ。“Song”における“will”と“shall”の使い分けは相手の意志を尊重しつつ、語り手との立ち位置にある「生と死の境界線」をもうたい込んでいることが垣間見える。このようにクリスティナの詩では“shall”は語り手の意志のみならず相手との関係性を表現するうえで劇的な効果をもたらす助動詞であると言える。

Ⅲ 助動詞 “shall” をめぐる問題

i 「予言」そして「微弱な意志」を表す “shall”

クリスティナの詩では助動詞“shall”によって語り手の「微弱な意志」が表明される例を別の詩, “From the Antique” (1852) から考察する。“From the Antique”は, 一人称複数で語られる抒情詩である。この一人称複数の語り手は前述の “Song”同様すでにこの世を去った死者であり, 死者がまだこの世にいる者たちへと呼びかける形式をとっている。この詩は詩中で用いられる助動詞がすべて“shall”である点が注目される。摩擦音を含む “shall”の音は詩全体に静的な響きを生じさせ, 永遠の眠りにつた語り手の語りを静謐なものにする効果を生んでいる。

The wind *shall* lull us yet,
The flowers *shall* spring above us;
And those who hate forget,
And those forget who love us.(1-4)

この詩の冒頭では語り手を取り巻く自然がそれぞれ主語になっている。このことは語り手がすでにこの世を去った存在であることを示唆しているだろう。三人称の「風」そして「花々」が語り手を取り巻き, なくさめるであろうことがここでは “shall”を用いて「予言」として述べられる。語り手はこの世を去って自然と一体になる。生きるものは「憎しみを捨て／愛する者も（その愛を）やがて忘れる」(3-4) とあるように, この世を去った者が次第に忘却されていく様がうたわれる。助動詞“shall”は続く連でも繰り返され, やがて予言から語り手の意志に転じて詩全体に浸透していく。

The pulse of hope *shall* cease,
Of joy and of regretting:
We twain *shall* sleep in peace,
Forgotten and forgetting.

For us no sun *shall* rise,
Nor wind rejoice, nor river,
Where we with fast-closed eyes
Shall sleep and sleep for ever.(5-12)

語り手はすでにこの世を去り、安らかな永遠の眠りにつくだろうとうたわれる。ここではこの世を去った語り手が「安らかに眠るであろう」(7)そして再び「永遠に眠るであろう」(12)と繰り返されることで生きている者へ自分たちの「存在」をわずかでも認識させようとする語り手の「微弱な意志」を読み取ることができる。また第三連の冒頭では語り手を取り巻く状況が“For us no sun shall rise / Nor wind rejoice, nor river[.]” (9-10)と主語に否定語がつき、「太陽が昇ることもなく／風も川もよろこびささやくこともなく」(9-10)と「ないこと」をうたえる語りの技法からは、この世にすでにいない、そこにはもうないという欠如していることを強調する論理から相手へその思いを伝える姿勢が読み取れる。クリスティナ・ロセッティの詩におけるこの論理について、Isobel Armstrongは“The beauty of the poem’s logic is that it defines the world of ‘non’, not as a norm but as an aberrant artifice, deviating from what we know of experience.”⁽¹⁶⁾とまで述べたが、「ないこと／ないもの」を積極的にとらえ、詩の技法にのせて表現することはクリスティナの詩作における独自性を考える上で重要な点であろう。そしてこの「ないこと」をめぐる論理は彼女の抒情詩ではしばし語り手の「微弱な意志」を示す助動詞“shall”とともに主体の存在に関する問題を内包するものへとつながっていく。次にこの「ないこと／ないもの」と助動詞“shall”をめぐる問題を考える。

ii 「ないこと」の論理と助動詞“shall”

“Dream-Land” (1849) は比較的初期に書かれた三人称の語りによる抒情詩であり、クリスティナによる他の抒情詩同様「死者」を登場人物として据えた作品である。この詩では、この世を離れて死者の世界へとやってきた登場人物の直面する世界が象徴的に描かれている。詩の冒頭では登場人物が死者の世界へとやって来た経緯が単純現在形および単純過去形で語られる。

Where sunless rivers weep
 Their waves into the deep,
 She sleeps a charmed sleep:
 Awake her not.
 Led by a single star,
 She came from very far

To seek where shadows are
Her pleasant lot. (1-8)

登場人物はこの世を離れて「影」(“shadows”)にあらわされる実体のない世界にやって来た。この「影」に囲まれた世界は表題の“Dream-Land”と呼応する世界である。第一連の冒頭から4行目まで、死者の世界に到来した「彼女」が眠りにつくところは現在時制で示され、後半の「(彼女が)遠くから到来した」(6) 経緯を示す過去時制との間には時間的および場所的な隔たりが存在し、クリスティナが詩作において時制を効果的に使うすべを意識していたことがうかがえる。

“shall”は最終連に集中し、「彼女」が永遠の眠りにつくまでの経緯がうたわれる。

Rest, rest, for evermore
Upon a mossy shore;
Rest, rest at the heart's core
Till time *shall* cease:
Sleep that *no pain shall* wake;
Night that *no morn shall* break,
Till joy *shall* overtake
Her perfect peace. (25-32)

“Dream-Land”では「時が止まるまで」(28)「彼女の全き平和に／喜びが追いつくまで」(31-32)とそうなることを予期し規定する“shall”とともにthat節に“shall”が用いられていることが注目される。特に永遠の眠りと明けることのない夜に包まれた死後の世界について述べた一節, “Sleep that no pain shall wake / Night that no morn shall break[.]” (29-30)では、「眠り」“sleep”や「夜」“night”という名詞が各行の冒頭に置かれthat節以下で修飾される結果、述部に重きが生じている。「どんな痛みも目覚めさせることのない眠り」(29)そして「どんな朝も明けない夜」(30)とthat節の主語“pain”そして“morn”に否定語“no”を付ける手法にはまた名詞を否定することで逆にそれらを強調するクリスティナ独自の論理が見られる。特に詩の最終連で述部に重点が置かれるため、主体である「彼女」の存在よりも「彼女」が死の眠りに到達するまでの「過程」が際立っている。ここでは語り手がその存在を誇示し、読み手を惹きつけるのではなく、最終連で述部に重点を置き、詩で語られる世界に読み手を惹きつけていく。読む

側に一方的に主張を展開していくのではなく、読み手側を詩で描かれる世界に手繰り寄せるクリスティナの巧みな手法が助動詞“shall”をめぐる一連の技法から明らかになってくる。

Ⅳ 主体の存在と助動詞、動詞の「消失」

i 主体の存在

その生涯において多様な詩作品を残したクリスティナ・ロセッティだが、彼女の詩作のうち抒情詩と並んで特筆されるべきものに物語詩がある。中期の作品“Moonshine”(1852)は三人称の語りのあいだに対話をはさまれる形式の物語詩であり、これまた死を主題にした作品である。主人公の男女の船出を通して死の世界への出立が象徴的に描かれているのだが、物語詩における助動詞“shall”の技法上の効果について考察する。詩は三人称による情景描写からはじまる。

Fair the sun riseth,
Bright as bright can be,
Fair the sun shineth
Or a fair fair sea.(1-4)

クリスティナは詩作において時制を効果的に使う点はすでに述べた。三人称単純現在形の語りによる情景描写からはじまるこの詩では敢えて動詞に古形“riseth,” “shineth”を用いることで現在の状況を述べる現在形でありながら物語という別世界へと読み手をいざなう効果を上げている。続く連では二人の男女の対話が展開するが、ここでも先に論じた“Song”の場合同様、二人称の助動詞に古形が使われ、物語の非日常性をさらに強調する。名前が登場しない二人の登場人物のうち「彼」が「彼女」を船旅へと誘う。旅立ちを約束してともに船出した二人はやがて海に沈み、死の世界へと赴くのだが、ここには女性を誘惑し死へと向かわせる“demon-lover”の主題もあるだろう。⁽¹⁷⁾ “Moonshine”では二人の運命をめぐる物語展開に助動詞が大きな役割を果たすのだが、作中、助動詞“shall”は二回使用されるにとどまっている。前半の対話の箇所では“shall”が“will”の古形“wilt”と対照的に使われる。

“If thou *wilt* hold me
Truly by the hand,
I *will* go with thee
Over sea and sand.

If thou *wilt* hold me
That I *shall not fall*,
I *will* go with thee,
Love, in spite of all.”(9-16)

語っているのは「彼女」である。「彼」とともに船出することに同意した彼女は「しっかりと／手を握っていてくれるなら／海原も砂州も越えて／ともに行く」（9-12）と相手の意志に自らの意志を重ね合わせていく。しかし「落ちないように／しっかりと手を握ってくれるなら／何があっても／ともに行く」（13-16）と続け、自らの意志を“will”で表しつつ「落ちないように」（14）と自身を相手にゆだねるところで“shall”を否定文で使う。結果的に死を招く船出を決意したところで用いられるこの“shall”は話し手の意志というよりむしろ完全に相手（彼）に自らの運命をゆだねてしまった「彼女」の「意志なき意志」を示していると考えられないだろうか。本来一人称で使う場合、もとは語り手の強い意志をあらわす意味であったこの助動詞がここでは相手に自らをゆだねる場面で使われている。「彼女」は「彼」の手中へと嵌っていったことが“shall”に読み取れ、詩の後半部では三人称の語りの部分で再び“shall”が用いられる。

And still he holds her
That she *shall not fall*,
Till pale mists whiten
Dimly over all. (53-56)

船出した後、月に雲が隠れ波が高くなり「彼女」が激しい不安を感じた直後の場面である。「彼女」が落ちないように手を握り続ける「彼」の様子が“shall”を用いて表現されるが、ここではすでに「彼」の手中から完全に逃れられなくなった「彼女」の身に起こる事がらを予言しているかのようでもある。三人称現在形の動詞も古形ではなく通常の形をとっており、続いて起こる悲劇をも含めて出来事を冷徹に叙述する効果を生んでいる。さらにこれまで述べたように助動詞は主体と関わっており、この一見冷徹

な描写も次なる悲劇が描出される際に一役を担うことになる。次にこの主体をめぐる表現について考える。

ii 助動詞、動詞の消失

“Moonshine”最終部では二人の登場人物の最期が描かれる。二人の乗った船は転覆し、二人とも死を迎えたであろう事がらが推察される場面が展開する。

Onward and onward
Far across the sea;
Onward and onward
Pale as pale can be;

Onward and onward,
Ever hand in hand,
From sun and moonlight
To another land. (57-64)

最終部で注目されるのは、まず主語が消失している点である。主語の消失は二人の死を連想させるものであるが、替わって繰り返される副詞“onward”が辛うじて二人の行った先を予想させる。最終連ではさらに主語に加えて助動詞、動詞も消失した形で表現される。「手と手を取り合ったまま／太陽、そして月の光から／別の世界へ」(62-64)と旅立った二人を詩の語りにおいて消失させることで逆に読み手に二人の存在を意識させる効果を生んでいる。ここにも「ないこと」を詩の中心的な論理に置くクリスティナの手法を垣間見ることができ、彼女の詩作における「存在しないこと」が「そこにはないものとしてあること」として読者に認識させる表現技法となっている。

V 抒情詩における動詞、助動詞の消失とその効果

i 助動詞“shall”の多用と効果

助動詞は本来、動詞とともに用いて動詞のみでは表現しきれない語り手のさまざまな心情や事がらを表現する効果を発揮する。クリスティナ・ロセッティは詩作において「決意」や「予言」そして語り手の意志を表す助

動詞“shall”を用いる際、詩の語りに関して「存在しないことがそこにあるものとしてある」という独特の論理に絡めながら巧みな表現技法として使ってきた。中期の抒情詩“Meeting”(1864)ではこれらの技法がさらに深化して使われる点を考察していく。

“Meeting”は人との出会いと別れをうたった作品である。一人称複数で語られるこの抒情詩では、この世でさまざまな別れを経験した者たちがやがてあの世で再会を果たすであろうことがうたわれる。この一人称複数による語りであるが、語り手が“we”と指す相手は語り手と関係の深い相手であることも推察され、事実上、二、三人称の親しみを込めた呼びかけとらえることもできる。⁽¹⁸⁾ この世に生きる者たちの経験する別れは離別であり死別であるが、それらをうたった詩中で頻繁に用いられる助動詞“shall”にまずは注目する。

If we *shall* live, we live;
 If we *shall* die, we die;
 If we live we *shall* meet again;
 But to-night, good-bye.
 One word, let but one be heard —
 What, not one word? (1-6)

“Meeting”では“shall”は合計6回用いられる。第一連の冒頭で3回使われるが、if節で用いられている点が注目される。「もし生きるというのなら、われわれは生きる／もし死を迎えるならば、われわれは死ぬだけ」(1-2)とはじまる一節からは語り手が自分たちではどうにもできないもの、あらがうことのできない生と死の問題を“shall”を使って表現している姿勢があがえる。あらがうことのできないものに言及する際に使われる“shall”は「予言」や「規定」の意味を含んでいるが、三行目では帰結節で“shall”が現れ、生きている限りいつか再会をするであろうから、それに従うという語り手の「決意」に転じていく。この「決意」に対して相手は答えることはなく、語り手の呼びかけのみで詩は展開していく。続く第二連では“shall”が帰結節で繰り返して使われる。

If we sleep we shall wake again
 And see tomorrow's light;
 If we wake, we shall meet again;
 But to-night, good-night.

Good-night, my lost and found —
Still not a sound? (7-12)

「眠れば再び目が覚めて／明日の光を見る」(7-8)という一節には当然そうなるという話者の期待が込められている。さらに9行目の「目覚めていれば／われわれは再び会うだろう」(9)という決意を示す一節には避けることのできない別れに対する語り手の思いが窺える。ここでいう“wake”とは生きることとそれに伴う別れを強く意識している姿への暗喩でもあろうか。“Meeting”は出会いとそれにともなう別れをうたった抒情詩であり、あらゆる別れを経ていつか再び会う意味での「出会い」をうたった詩でもあるのだ。出会いを経てやがてやってくる死別というどうにもできない出来事そして人の「決意」をもすべて“shall”に込めて描くことで、クリスティナは去来する語り手の思いを同時に複数反映させることに成功したといえる。

ii 助動詞“shall”の効果そして消失

“Meeting”に用いられる助動詞“shall”には語り手の思いが複数反映されている点を考察したが、避けられない別れすなわち死別に言及した第三連では“shall”の使用は1回にとどまり、最終連では再び動詞とともに助動詞は消失する。“Meeting”の語り手の構造を考えるにあたって死に言及した直後、再会を予言する一節がうたわれる第三連からみていく。

If we live, we must part;
If we die, we part in pain;
If we die, we *shall part*
Only to meet again.
By those tears on either cheek,
To-morrow you will speak. (8-13)

「生きている限り、別れなければならない／死を迎えるとき、悲痛とともに別れる」(8-9)とはじまる一節で語り手が現実を直視する決意を表明した直後に「死を迎えてもそれは／再び会うまでの別れにすぎない」(10-11)と続き、死はいつか再会うまでの一時的な別れであることが予言される。この一節は句またがりとなり、結果を表すto不定詞が続くことで助動詞“shall”の持つ予言の意味を強める効果も生じさせている。このように見ると、“Meeting”においてクリスティナは助動詞“shall”の持つ文法上の機能を最大限に発揮しつつ詩の語り手の技巧に関して大きな効果をもたらすこ

とに成功したといえる。

“Meeting”では第三連まで語り手の心情を反映し助動詞“shall”が使われるが、最終連で再び助動詞、動詞が消失する。最終連では語り手は「再び会うこと」についてうたい上げていく。

To meet, worth living for;
Worth dying for, to meet;
To meet, worth parting for;
Bitter forgot in sweet.
To meet, worth parting before,
Never to part more. (14-19)

出合いがあるから生きる価値はある、そして死も再び迎える出合いのためには受け入れられる。生きている限り、会うことは叶えられる、そしてこの世を去っても再会がある限り別れにも意義があるといううたえが繰り返される最終連では一人称複数の主語は消え、助動詞と動詞も完全に消失し、代わりにto不定詞や動名詞など準動詞を用いて詩の語りを展開されていく。すでに述べたようにクリスティナ・ロセッティの詩における動詞と助動詞の消失は隠される主体に関係し「そこにはないものとしてある」ことを描いて逆にその存在を強調する効果をもたらしてきたが、助動詞“shall”の用法から考察すると明らかになるこれら一連の手法は詩の語りに読者を十分惹きつけてやまないものとなっている。クリスティナは助動詞“shall”を存分に吟味して詩の語りと技法に最大限活用したといえる。

結

クリスティナ・ロセッティは生涯にわたる詩作において助動詞を多用してきた。現代英語の用法よりもさらに“will”と明確に区別されていた“shall”を多く用いて話し手の意志や予言といった文法上の意味や機能のみならず、語り手や登場人物の微細な心情の動きを「ないものとしてあること」を描く独特の論理に絡めて豊かな詩の表現技法にしていた。比較的平易で明快な言葉遣いから読み手を詩の世界へと惹きつける巧みなわざであり、これらが彼女の作品が時代を超えて読み継がれる所以となっていることは想像に難くない。

註

- (1) 各作品の発表年を括弧内に記す。発表年については Betty S. Flowers, “Notes,” *Christina Rossetti : The Complete Poems*, R. W. Crump and Betty S. Flowers, eds, London, Penguin, 2001によるものとする。
- (2) 綿貫陽編『ロイヤル英文法』第2版, 東京, 2004年, 455頁。
- (3) 綿貫, 456頁。
- (4) 小稲義男編『研究社英和大辞典』第5版, 東京, 研究社, 1980年, 1942頁。
- (5) 小稲, 1942頁。
- (6) “shall” Def. 1. *The Oxford English Dictionary*, 1933, rp.,1970.
- (7) “shall” Def. 2.
- (8) “shall” Def. 4.
- (9) “shall” Def. 7a.
- (10) “shall” Def. 6.
- (11) “shall” Def. 8a.
- (12) “shall” Def. 8a.
- (13) Phil Roberts, *How Poetry Works*, 2nd ed, (London: Penguin, 2000) 64.
- (14) Roberts, 64.
- (15) R. W. Crump and Betty S. Flowers, eds. *Christina Rossetti : The Complete Poems*, (London : Penguin, 2001) 52. (以下, 本稿における詩の引用は同書による。引用後の括弧内に行を示す。なお, 引用中のイタリック体はすべて筆者によるものとし, 和訳の箇所はすべて筆者による拙訳とする。)
- (16) Isobell Armstrong, “Christina Rossetti — Diary of a Feminist Reading,” Tess Cosslett, ed, *Victorian Women Poets*, (London / New York : Longman, 1996) 158-175.
- (17) “demon-lover”を主題にしたクリスティナ・ロセッティの作品として “Love from the North” (1856) が知られる。
- (18) 綿貫陽編『ロイヤル英文法』182頁には「he sheの代わりに用いられるwe」として一人称複数形の特殊な用例が挙げられている。

参考文献

- Armstrong, Isobell. “Christina Rossetti — Dairy of a Feminist Reading.”
Ed. Tess Cosslett. *Victorian Women Poets*. London / New York : Longman,
1996.
- Flowers, Betty S. “Notes.” Eds. R.W. Crump and Betty S. Flowers.
Christina Rossetti : The Complete Poems. London : Penguin, 2001.
- 小稲義男編。『研究社英和大辞典』第5版, 東京, 研究社, 1980年。
- Marsh, Jan. *Pre-Raphaelite Sisterhood*. London : Quartet Book Ltd., 1985.
- ピーターセン, マイク。『実践 日本人の英語』東京, 岩波書店, 2013年。
- Roberts, Phil. *How Poetry Works*. 2000. London : Penguin, 1991.
- Roe, Dinah. “Introduction.” *Christina Rossetti : Selected Poems*. London :
Penguin, 2008.
- Rossetti, Christina. *Christina Rossetti : The Complete Poems*. R. W. Crump
and Betty S. Flowers. London : Penguin, 2001.
- “Shall.” *The Oxford English Dictionary*. 1933, rp., 1970.
- 綿貫陽編。『ロイヤル英文法』第2版, 東京, 2004年。